

会長の挨拶 11 制度的意味論（アメリカにおける三大奉仕クラブ…その2）

ロータリーが奉仕クラブであるからには、奉仕家たる職業人によって構成さるべく、奉仕家たる資質をもったロータリアンが会員に選任された場合にも、他の優秀な奉仕家に対して会員の門戸が閉ざされてしまうことその他、特定の職業分類のロータリアンがその地域社会においておよそ奉仕家として恥かしい企業経営を行っているにも拘わらず、当該クラブの会員選考手続きをパスした場合には、その職種の職業人は当該ロータリークラブを軽侮の念をもって見るばかりか、そのクラブもまたロータリーの奉仕エネルギーがその職種に伝わらないばかりか、逆にロータリーに所属しない職業人の社会的倫理基準がロータリアンのそれより高いということすら起こるのである。

このような一業一会員制に対する批判は、ロータリークラブの内部では、これに対する緩和の主張になって現れるが、更にロータリーに所属していない奉仕家の側から見れば、いま一つのロータリークラブを作るべき必要性を感じさせるのはしごく当然のことと言わなければならない。

この立場から一業一会員制を柱としたいいま一つのクラブとして生まれたのがキニワスクラブであって、1915年のことである。キニワスとは、アメリカ・インディアンの言葉であって、自己顕示を意味するという。この言葉は、従って、キニワスクラブが個人奉仕を中心とする奉仕クラブであるということを物語るものである。自己を練磨し、自己の精神力を物質世界に投入し、そこに得られた成功と社会的名声とを、クラブ活動を通じて更に社会に還元しようとする意図がこの自己顕示という一語の中に、万感を込めて語られているからである。キニワスクラブは従来主としてアメリカ合衆国とカナダに主として運動が行われていたが、近年日本にも移入され、東京・大阪・名古屋・神戸・広島・仙台等にクラブ作りを行っているという。現在その会員数は少ないが、将来の発展の方法如何によっては非常に興味深いものを持っている。

続きは次回にします。

（小堀憲助著 『ロータリー思想の理論構造』より引用）